小中一貫校　南アルプス市立白根御勅使中学校「学校だより」　令和８年度第１６号



一生懸命 In 一期一会

《学校教育目標》
「志を持ち 道を拓く生徒」

１０．７（水）　文責：担当 川崎幸司

「南アルプス署管内防犯・交通安全弁論大会」

９月８日（火），あやめホールにおいて
＜南アルプス署管内　防犯・交通安全弁論大会＞
が行われました。本校の今年度の代表は，防犯弁論に３年生の橋爪希典さん，交通安全弁論に2年生の名取詞葉さんんが出場しました。橋爪さんは自身や家族の体験を堂々と発表しました。また，名取さんも臆することなく，自身の体験をまじえて優しい口調で聴衆に語りかけました。結果は，**橋爪さんは入賞，名取さんは最優秀賞に選ばれました。**名取さんは１０月２８日（水）に行われる県大会に南アルプス署管内代表として出場します。健闘を期待しています。以下は二人の弁論の原文になります。どうぞご覧ください。

防犯弁論の部　入賞

「考える葦」をやめた私たち　　橋爪　希典

今，私たち中学生にとってインターネットは生活に欠かせないものです。調べ学習をしたり，親や友達と連絡を取ったりと，非常に便利な存在です。しかし，その便利さの裏には，私たちに身近な危険が潜んでいます。インターネット上では，誹謗中傷や炎上，個人情報の流出が毎日のように起こっています。軽い気持ちで投稿した一言が誰かを深く傷つけたり，一枚の写真から住所や学校が特定され，犯罪につながったりすることもあります。また，ネット上に悪口が書き込まれ，それが現実の学校生活での仲間外れに発展するなど，ネットと現実が連動した「いじめ」の構図も生まれています。

では，なぜこのようなことが起こるのでしょうか。その理由の一つとして，「認知の歪み」という考え方があります。認知とは，物事をどのように受け止め，理解するかということです。しかし，人は誰でも自分が見たいものを見たいように見て，都合の良いように物事を解釈してしまうことがあります。例えば，クラスの同級生が挨拶を返してくれなかったとします。本当は急いでいたり，気付いていなかったりしただけかもしれません。しかし，「無視された」「嫌われているに違いない」と思い込んでしまうことがあります。このように，十分な証拠がないのに悪い方向へ決めつけてしまうのも，「認知の歪み」の一つです。

今挙げたような思い込みがインターネット上でも起こるため，誹謗中傷や炎上につながり，犯罪やいじめに発展してしまうのです。このような思い込みはとても危険です。一度投稿した言葉は簡単には消えず，相手の心を深く傷つけます。「みんなが書いていたから」「冗談のつもりだった」という理由では，絶対に済まされません。画面の向こうにいるのは，感情を持った一人の人間なのです。

では，私たちはどうすれば「認知の歪み」に振り回されることなく，安全にインターネットを利用することができるのでしょうか。皆さんは覚えているでしょうか。私たちは，中学一年生の時に「ちょっと立ち止まって」を，そして中学三年生の時に「作られた物語を超えて」という説明文を，国語の授業で学習したはずです。この二つの文章には，共通して書かれていることがあります。それは，人間は一目見た時の印象に縛られて一面のみを捉え，そのすべてを知ったように思い込んでしまうということです。そして，自分の都合の良いように捉えてしまう。だからこそ，そうならないために，違った面から物事を見たり，相手の立場に立って客観的に捉えたりすることが大切である，ということです。学校でこのような大切なことを学んだにもかかわらず，今のネット社会では，それが全く生かされていないのが現状です。知識としてテストのために覚えるだけで，スマートフォンの画面を前にした途端，私たちはその大切な教訓を忘れてしまっているのではないでしょうか。

皆さんは「人間は考える葦である」という言葉を知っていますか。これは十七世紀の哲学者パスカルが，その著書「パンセ」で述べた言葉です。人間は自然の前ではか弱い存在ですが，「考える」という偉大な力を持っています。流されるままに判断するのではなく，立ち止まって自らの頭で考え続ける姿勢こそが，人間としての尊厳や強さを生み出すという意味です。

情報があふれ，誰もが発信者になれる現代だからこそ，私たちは今一度，この「考える力」を取り戻さなければなりません。スマートフォンの画面をタップする前に，一瞬指を止め，自らに問いかけるのです。「これは本当に事実だろうか」「この言葉で傷つく人はいないだろうか」と。

私は，これからも見たいものを見たいように見るのではなく，事実を確かめ，相手の立場を考えるということを意識し続け，インターネットを利用したいと思っています。そして，私たち中学生一人ひとりが「考える葦」となり，誰もが傷つくことなく，安心して暮らせるインターネット社会を，この地域から築いていくことを強く願っています。




交通安全弁論の部　最優秀賞

「いってきます」に込められた約束　　名取　詞葉

　みなさんは朝，家を出るときに「いってきます」という一言を家族に伝えていますか？
では，その一言にどんな意味が込められているか，考えたことはありますか？

　私は毎朝，家を出るときには必ず「いってきます」と言うようにしています。そうすると，家族はいつも「気をつけてね」と声をかけてくれます。以前の私は，「いってきます　」を「ただ学校へ行ってきます」という意味のあいさつだと思っていました。しかし，交通安全について考える中で，その言葉には「交通ルールを守り，安全に行動し，無事に返ってきます」という約束のような意味も込められているのではないかと思うようになりました。その約束があるからこそ，家族は「気をつけてね」と声をかけてくれるのだと気づいたのです。しかし，その約束を守ることは，そんなに簡単なことではありません。

　その日，私は学校に遅れそうになり，急いで自転車を漕いでいました。点滅している信号にさしかかった時，「急げば渡れるかも知れない！」
そんな考えが頭をよぎりました。でも，その日私は止まることを選びました。学校に遅れるよりも，安全に学校へ行くことのほうが大切だと思ったからです。

　私はこの出来事を通して，交通ルールは私達を縛るためのものではなく，安全に目的地へ向かうためにあるのだと改めて感じました。
私は毎日，自転車で学校へ通っています。朝は時間に追われ，急がなきゃと思いながらペダルを漕ぐ日もあります。信号が変わりそうになると焦ったり，後少しだから大丈夫だろうと思ったりしてしまう自分に何回も出会いました。事故は危険な場所だけで起こるものではありません。通い慣れた道や，家まであと少しという安心した瞬間にもそれは起こります。危険だと感じているときほど，人は慎重になりますが，もう大丈夫と気を緩めたその一瞬が，大きな事故につながることもあるのです。

　私は交通安全について調べる中で，多くの事故が，一瞬の判断や確認不足から起きていることを知りました。日本で起こる交通事故は，年間約三十万件です。そのうち，安全不確認による事故は，全体の約３０パーセントを占めています。数字だけを見ると遠い出来事のように感じるかも知れませんが，その一件一件の事故の向こうには，学校へ向かっていた人や仕事へ向かっていた人，そして，帰りを待っていた家族がいます。もし，たった一度の油断で事故にあってしまったら，「ただいま」と言って家族のもとに帰ることは出来ません。私は，交通ルールは「守らなければいけない決まり」だと思っていました。しかし，今は違います。交通ルールは，自分の命を守るためだけのものではありません。自分の帰りを待ってくれている人たちとの約束を守るためのものでもあるのです。

　これから私は，「気をつけてね」という家族の願いを忘れず，その約束を守れるよう，交通ルールを今よりも大切にしていきたいです。しかし，その約束を必ず果たせるとは限りません。交通事故は特別な人だけに起こるものではなく，私達の身近にある危険です。だからこそ「自分は大丈夫」という考えを持たず，一人ひとりが交通安全について理解し，意識することが大切だと思います。

　交通事故は一瞬の油断で起こります。しかし，一瞬の意識によって防ぐこともできるのではないでしょうか。一時停止をすること，左右をしっかり確認すること，小さな当たり前を積み重ねていくことで，約束を果たすことができると私は思います。

　「いってきます。」毎朝，当たり前のように言って家を出るこの一言。その一言には，安全に行動するという自分自身への約束と，私を送り出してくれている家族への約束が込められています。交通ルールを守ることは，その約束を守ることにつながります。だから私は，「いってきます」という何気ないこの一言の重みを忘れず，家族が安心して送り出してくれるような行動を心がけたいです。



